

「ボドリアン図書館シェリー稿本集成」と ロマン派本文編纂の新動向*

床 尾 辰 男

P. B. Shelley の作品の草稿 (MSS) は、ほとんどがオックスフォードのボドリアン図書館 (Bodleian Library, Oxford) に収められている (他に手紙もかなりの数のものがそこにある)。シェリーの MSS はほとんどすべて作品の下書きで、清書原稿はあまり残っていない。組版のあと、印刷所ないし出版社が処分してしまったと考えられている。作品の下書きはノートブックに書きつけられているが、ノートブックには作品の下書きだけでなく、読書メモや手紙の下書きも含まれる。そのような下書用ノートブックがボドリアン図書館に 22 冊ある¹⁾。これ以外にアメリカの Huntington Library に 3 冊²⁾、New York Public Library に 1 冊³⁾残っている。これらのノートブックのファクシミリ版を出版しようという企画が 1980 年代の中頃に生まれ、「ボドリアン図書館シェリー稿本集成」(Bodleian Shelley Manuscripts) 全 23 巻として現在刊行中である。ハンティントン図書館にあるノートブックについては、姉妹シリーズである *The Manuscripts of the Younger Romantics* に収められている。Bodleian Shelley Manuscripts は、1997 年 12 月までに、最終巻である第 23 巻 (補遺と索引を収録することになっている) 以外の 22 巻すべてが刊行された。

編集主幹である Dr. Reiman によると、この企画の目的は研究者自らが作品本文の基礎となっている草稿を調べて、標準版とされている本文の正当性を確かめられるようにすることである⁴⁾。研究者は通常少数の専門家が編纂した本文をそのまま受け入れ、彼らの判断に疑問を差し挟むことがない。しかしライマン氏は、シェリーの本文の場合これは危険だと考える。この危険性をよく示しているのが Oxford English Texts 版シェリー詩全集 (OET Shelley) の例である。OET Shelley の編者 Neville Rogers は

自分の編集方針について「シェリー本文の歴史は、シェリーが生前友人たちや印刷所に期待した役割——校正、大文字小文字の使い分け、句読点の調整など——を、Mary Shelley から Hutchinson に至る歴代の編纂者が果たしてきたことを示している。自分も同じ役割を果たすべく努力した」⁵⁾と述べている。彼の本文校訂の方法は校註 (Textual Notes) に見られる次のような表記によって窺い知ることができる。

PRINTED: *PBS, 1813 / MWS, 1839¹, 1839² / Hutch. 1904*
 TEXT: *1904 / 1839² / 1839¹ / 1813. . .*

これは初期の作品 *Queen Mab* の例である。PRINTED の行はこの作品がシェリー自身によって 1813 年に出版された後、メアリ・シェリーが 1839 年の 2 つの版において本文に修正をほどこし、さらにハッチンソンが 1904 年版においてメアリ以後の諸版を照合して自己の本文をつくったことを表わしている。TEXT の行はロジャーズの本文がハッチンソンの本文を基礎として、それをそれ以前の諸版と照らし合わせて作られたものであることを示している。ロジャーズが Clarendon Press に送った原稿はハッチンソン編 Oxford Standard Authors 版シェリー詩集のページを切り貼りしたものに必要な訂正を施したものだだったそうである。

しかし、メア리를初めとする 19 世紀の編纂者の本文には多くの問題が含まれていることが、そのとき既に明らかになっていた。C. H. Taylor: *The Early Collected Editions of Shelley's Poems* (1958) は、メアリ編の 1839 年全集が印刷用原稿として海賊版である Galignani 版 (1829) や Ascham 版 (1834) を用いたこと、彼女が健康上の理由で校正 (初版本, 草稿, シェリーが用意した正誤表などとの照合 [校合]) を十分にできなかったことなどのため、1839 年版には 1829 年版や 1834 年版から持ち越した誤りや信頼できない読みが多数含まれていることを明らかにした。メアリ以後の重要な編纂者は Rossetti および Forman であるが、ロセッティ編の『シェリー詩集』(1870) は恣意的な本文校訂で論議を呼んだ版であり、メアリの本文に最終的な権威を認めてそれに依拠したフォーマンの版 (1876) もメアリの本文と同じ問題点を有している。ハッチンソン版は

これら 19 世紀の本文を集大成したものだった。

ロジャーズの過ちは、ハッチンソン版以後に利用可能となった多くの新資料を十分に活用せず、ハッチンソンおよびそれ以前の 19 世紀の編集者に全面的な信頼をおき、ハッチンソンの本文を出発点として、それを過去の版へとさかのぼって照合していったことである。彼は草稿調査の結果を本文に反映させることもあるが、調査の結果をどのように取捨選択したのかについては説明しない。彼自身が重要と思う異文 (variant) を校註として記録するだけである。私たちには彼の判断が正しいかどうか確かめる手段が与えられていない。ノートブックに含まれる草稿の異文を校註において網羅することは困難であるので、本文と有意的に (significantly) 異なる異文のみを記録するというのが、ロジャーズの方針である⁶⁾。しかし何が有意的で何がそうでないか決める際には編者の判断が入りこむが、私たちは編者の判断をそのまま信頼することを求められている。ロジャーズはシェリーの作品自体が研究対象である者には異文は少数の例示で十分であるという。そしてロジャーズは草稿研究を本文編纂の基礎におくべきだと主張する研究者たちを揶揄する口調で付け加える——シェリーが書き残したものはすべて重要だと考える人たちのためには、異文を細大もらさず収録した版を別に用意しているが、そのような版は元の原稿ないしそのファクシミリを傍らにおいて利用するのでなければ役に立たないだろう、と⁷⁾。もっともそのような版が用意された形跡はない。ひょっとするとこの発言が Bodleian Shelley Manuscripts の企画にヒントを与えたのかも知れない。

草稿に照らして既成の本文の妥当性を確認するための便宜を提供することが Bodleian Shelley Manuscripts シリーズの第一の目的だが、それだけではない。このシリーズに含まれているシェリーのノートブックには、作品の下書きの他に、読んだ書物からの抜き書き、それに関するコメント、プラトンやダンテなどの翻訳、手紙の下書き、個人的メモなどが含まれている。作品の下書きは、シェリーの推敲の過程、たとえば執筆のどの段階でどういう語やイメージが付け加えられたか削除されたか、あるいは敷衍ないし変形されたかというようなことを教えてくれるので、シェリーの本文に対する私たちの読みは、刊行された本文だけに頼っていたときより深く

なるだろう。また作品の下書きと混じって存在する読書メモや他の作品の下書きは、その作品と読書中の書物との関係、ひとつの作品と他の作品とのかかわりを暗示する。このような情報をシェリーの作品全体の理解を深めるための手がかりとして提供することもこのシリーズの目的のひとつである。

Bodleian Shelley Manuscripts シリーズの刊行は孤立した現象ではない。最近のイギリス・ロマン派研究の傾向にそったものである。最近のロマン派研究においては、本文の問題が大きなテーマとなっている。過去2、30年の間に主要なロマン派詩人すべてについて本文の再検討が行なわれ、その成果が新編纂の全集として次々に刊行されつつある。シェリーの場合は後で見ることにして、ロマン派の新詩集を刊行済みのものから挙げてゆくと以下のようになる。

Keats: *The Poems of John Keats*, ed. Jack Stillinger (1978). 1 vol.

Byron: *Lord Byron: The Complete Poetical Works* (Oxford English Texts), ed. Jerome J. McGann (1980-1993). 7 vols.

Coleridge: *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge* (Bollingen Series LXXV), ed. Kathleen Coburn et al. (1969-). 13 vols. to date (16 vols. in all)

Wordsworth: *The Cornell Wordsworth*, ed. Stephen Parrish et al. (1975-). 16 vols. to date (? vols. in all)⁸⁾

キーツの場合はスティリンガーが、過去に刊行されたすべての版および現存するすべての原稿を詳細に検討して新たに校訂した本文を、執筆年代順に配列している（検討の成果は *The Texts of Keats's Poems* [1974] として出版された）。それまで標準版とされていた Garrod の本文はそれ以前の諸版から持ち越された誤りを多く含んでいたし、詩の配列方法も違う。ギャロッドの版はキーツの生前および死後に出版された詩集ごとの配列になっていた。Oxford English Texts シリーズのためにバイロンの詩を編集し直したマックガンは、前回の本格的編集以後1世紀近くの間集まった多数の新資料を盛り込む一方、旧標準版には欠けていた詳しい校註や注

積を補った。なお、The Manuscripts of Younger Romantics シリーズにはキーツとバイロンの MSS (主に清書原稿) がファクシミリで収録されている。キーツ 7 巻 (スティリンガー編)、バイロン 13 巻 (マックガン他編) から成る。

若死にして自分の作品を改訂する機会がなかったキーツやバイロンの場合、編纂者はどの本文が作者の意図をもっとも正確に伝えているかという問題に頭を悩ませる必要はあまりない。しかし長生きして生涯自分の作品に手を加え続けたワーズワスやコウルリッジについては、これが大きな問題となる。「作者の意図を正確に伝える本文」を読者に提供するのが本文批評家・本文編纂者の任務である。伝統的に本文校訂の仕事は、校訂に当たって出発点とする本文をひとつ選ぶことから始まるのであるが、この「出発点とする本文」(「作者の意図をもっとも忠実に伝えていると思われる本文」) を copy-text と呼ぶ⁹⁾。ふつうは、作者自身の原稿に基づいた初版を copy-text にする。これはもともとはルネサンス期の本文を編纂するに当たって考え出された用語で、限られた数の版本 (エディション) や稿本 (マニュスクリプト) しか残っていない作品については有効な概念だった。しかし多くの版本や稿本があるワーズワスやコウルリッジの作品の場合、どれを copy-text にするか決定するのは容易ではない。たとえばワーズワスの『序曲』(*The Prelude*) の場合、最初に執筆されてから 50 年間作者の手元に置かれて改訂の筆が加え続けられた。Jonathan Wordsworth の計算によると、この作品について 17 の異なった段階の草稿を区別できるという。それも個々の語や句読点の変更ではなく、本格的な改訂が 17 回である。それぞれの改訂を終えたワーズワスは少なくともその時点ではこれでよしと考えたのである。しかしジョナサン・ワーズワスは、ワーズワスの改訂は通常、敷衍加筆という形をとったが、ワーズワスの創作力が旺盛であった時期においてもそれは詩の改悪となることが多かったともいう¹⁰⁾。Stephen Gill も、『序曲』が語る「詩人の精神の成長」はそれが最初に完成した時点に可能な限り近い本文によってもっともよく伝えられると考える¹¹⁾。この立場からは、『序曲』の編纂には 1805 年の本文を copy-text とすべきだということになる。しかしジョナサン・ワーズワスは別の角度からもこの問題を考える。もし『序曲』がただ単に青年期の

ワーズワスをうたう詩であったならば、ワーズワスは何も改訂を繰り返さなくてもよかった。しかしこの作品は、もっと広く、彼の物の考え方・価値観全般をうたう詩であったのだ。したがって、年齢や時代とともに変化してゆく彼の考え方・価値観を反映させるために改訂し続けなくてはならなかった。それが、自己に忠実であろうとすれば取らざるをえなかった態度なのだ、と¹²⁾。このように考える立場からは、ワーズワスが死んだ時点で残っていた本文である 1850 年の本文を copy-text とすることになる。

しかし、問題はどちらがより正しい本文かということではない、どちらも正しい本文なのだという、第三の立場が最近力を得てきている。作者が各段階でよしとした本文はすべて独立した本文の地位を要求できる。したがって critical edition にはそれらをすべて提示すべきだという考えである。これを Versioning (諸版提示) という。最初は『序曲』について、ギルとともに 1805 年本文推進派であったジョナサン・ワーズワスも最近では Versioning の考えを採用している。彼の編集で最近出版されたペンギン版『序曲』は *The Prelude: The Four Texts (1798, 1799, 1805, 1850)* と題され、1805 年版、1850 年版の他にそれ以前の 2 つの版をも収録している。また The Cornell Wordsworth も、ワーズワスの全作品について草稿として残っている各種の本文を収めている。

コウルリッジも自分の作品に改訂を加え続けた詩人だった。ただし彼の場合、改訂本文はほとんどが生前に刊行済みである。Bollingen Series コウルリッジ全集の最終巻である第 16 巻 *Poetical Works* (未刊) の編者 Mays は Versioning の考えを全面的に取り入れるという。彼は異文を校註として脚注ないし後注の中に示すのではなく、ページの本体をなす詩行に織り込む形で示そうとしている。そうすることによって読者は作品を読み進めながら各自の判断で各詩行の下に記された異文を取捨選択し、自分がかつとも正しいと思う version を作り出すことができる。もっとも、この variorum volume (異文集成巻) とは別に、編者の判断でもっとも妥当と思われる異文を選択して作成した reading text (通読用本文) を収めた 1 巻が添えられるようである。

シェリーの場合出版後に改訂を行なった例は多くないので、コウルリッジの場合のような Versioning は必要ないかも知れない。彼については、

彼の死後にメアリその他の編纂者が彼のノートブックから拾い集めて自由に編纂の手を加えて出版した短詩や断片が問題となる。この種の作品がシェリーの全集のかなりの部分を占めている。これらについては研究者各自が直接草稿に就いて既存の本文の正当性を確認したほうが安全である。そのようなとき研究者に便宜を提供するのが Bodleian Shelley Manuscripts である。草稿のファクシミリに転写本文を添えたこのシリーズによって、研究者はわざわざボドリアン図書館まで出かけていかなくとも、草稿における推敲の跡をたどったり、現行本文の読みの当否を確かめたりすることができる。作者の意図を正確に反映した本文がすべての文学研究の出発点となることを考えれば、この企画から研究者が受ける恩恵は小さくないであろう。なお、現在編纂作業が進行中の Johns Hopkins University Press 版のシェリー詩全集においては、全4巻のうち第1巻～第3巻はシェリーが生前に完成させていた諸作品の校訂本文を収め、第4巻にノートブックに未完成の状態に残されていた短詩と断片を、編集の手を加えず、草稿の転写本文の形で収録する予定だそうである。

Bodleian Shelley Manuscripts シリーズも、草稿のファクシミリ版は、予定された22巻がすべて出そろった。ただしこれらの各巻には索引がついていない。ところが総索引によって全巻を有機的に結びつけることなくしては、このシリーズの価値は半減するのである。各巻は1冊（例外的には2冊ないし3冊）のノートブックを収録しているが、ノートブックの使い方にシェリー独特の癖があるからである。彼は複数のノートブックを同時に使って詩を書く。使いかけのノートブックに新しい作品を書き始めて余白がなくなると、彼はスペースを求めてあちらこちらのノートブックをわたり歩く。たとえば *Epipsychidion* の草稿は3冊のノートブック、*Adonais* の草稿は4冊のノートブックに書き付けられている。しかも草稿の本文は必ずしも刊行された本文の順序に記載されているわけではない。このような場合、索引は欠かせない。作品以外にも相互参照を必要とする項目はいろいろある。シリーズ最終巻である第23巻には、収録全作品の索引のほか、各ノートブックの内容一覧、シェリーの草稿に使われている紙の、透かし模様 (watermark) の一覧（これは作品の執筆年代推定の手がかりを与える——ボドリアン図書館シェリー MSS 管理者 Dr. Bar-

ker-Benfield 担当), 補遺, 全巻の正誤表などが収められることになっている。

注

* 本稿は 1996 年度「視界同人会」例会 (1996 年 12 月 15 日) で行なった談話に基づいている。

Important editions of Shelley's poetical works:

- (1) Mary Shelley (ed.): *Posthumous Poems of P. B. Shelley* (1824)
- (2) Galignani's *The Poetical Works of Coleridge, Shelley, and Keats* (1829)
- (3) Ascham's *The Works of P. B. Shelley*, 2 vols. (1834)
- (4) Mary Shelley (ed.): *The Poetical Works of P. B. Shelley*, 4 vols. (1839)
- (5) Mary Shelley (ed.): *The Poetical Works of P. B. Shelley*, 2nd ed. 1 vol. (1840)
- (6) W. M. Rossetti (ed.): *The Poetical Works of P. B. Shelley*, 2 vols. (1870)
- (7) H. B. Forman (ed.): *The Poetical Works of P. B. Shelley*, 4 vols. (1876)
- (8) Thomas Hutchinson (ed.): *The Complete Poetical Works of P. B. Shelley* (1904; OSA ed., 1905)
- (9) Neville Rogers (ed.): *The Complete Poetical Works of P. B. Shelley*, Oxford English Texts, vols. I and II (1972, 1975) [OET Shelley]
- (10) D. H. Reiman and S. B. Powers (eds.): *Shelley's Poetry and Prose*, Norton Critical Edition (1977)
- (11) Timothy Webb (ed.): *P. B. Shelley: Selected Poems*, Everyman's University Library (1977)

- 1) (I) Bodleian MSS. Shelley d. 1 (**vol. 4**), d. 3 (**vol. 8**), e. 1 (**vol. 9**), e. 2 (**vol. 9**), e. 3 (**vol. 9**), e. 4 (**vol. 3**), e. 6 [*Defence*: fair copies] (**vol. 20**) [*Bequest of Lady Shelley*, 1893]
- (II) Bodleian MSS. Shelley adds. c. 4 (**vol. 21**), adds. c. 5 [Additions: Mary's hand] (**vol. 22**), adds. d. 2 [Mary's plays] (**vol. 10**), adds. d. 6 [Additions: Mary's hand] (**vol. 22**), adds. d. 7 [Mary's Copy Book] (**vol. 2**), adds. d. 8 [*Defence*: fair copies] (**vol. 20**), adds. e. 6 (**vol. 5**), adds. e. 7 (**vol. 16**), adds. e. 8 (**vol. 6**), adds. e. 9 (**vol. 14**), adds. e. 10 (**vol. 17**), adds. e. 11 (**vol. 15**), adds. e. 12 (**vol. 18**), adds. e. 13 [The Cenci story] (**vol. 10**), adds. e. 14

- (vol. 13), adds. e. 15 (vol. 7), adds. e. 16 (vol. 11), adds. e. 17
 (vol. 12), adds. e. 18 (vol. 19), adds. e. 19 (vol. 13), adds. e. 20
 (vol. 7) [*Bequest of Sir John Shelley-Rolls*, 1946]
- 2) Huntington Library Shelley MSS.: HM 2111 (*The Manuscripts of the Younger Romantics* [MYR], Shelley VII), HM 2176 (MYR, Shelley VI), HM 2177 (MYR, Shelley IV)
 - 3) Pforzheimer Shelley and his Circle Collection MS.: SC 546 (Esdaile Notebook)
 - 4) One of the ideas behind the project I initiated for Garland Publishing that became *The Manuscripts of the Younger Romantics* and its collateral series *The Bodleian Shelley Manuscripts* was to make available the major extant manuscripts underlying the literary texts of Byron, Shelley, and Keats ... to encourage more scholars to analyze the full range of textual evidence on the genesis of these poems and the validity of the standard editions of the authors... (Donald H. Reiman, *Romantic Texts and Contexts* [1987], p. 173)
 - 5) The history of Shelley's text shows the successive work of editors, from Mary Shelley to Hutchinson, in carrying out the services for which Shelley, in his lifetime, looked to his friends and his printer. These services I have tried to continue... (OET Shelley, vol. I, p. xxxiii)
 - 6) The principle I eventually adopted was to collate from the draft only what varied *significantly* from the printed text variants, that is to say, which represented, as far as was discernible, those intentions of Shelley's which were his final ones at the moment when it was penned. (OET Shelley, vol. II, p. xvi)
 - 7) For students of Shelley-the-poet a limited number of such illustrations should suffice: to multiply them would be to drift towards the dark night of a variorum edition. For the benefit of those students of Shelley-the-scribe for whom comprehensiveness is, apparently, an end in itself, a literal version is being prepared for separate publication. It may be observed in passing that only when used *pari passu* with manuscripts or reproductions of them can such publications be put to any practical use. (OET Shelley, vol. II, p. xvii)

8) これまで標準版とされてきたもの：

Wordsworth: *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. Ernest de Selincourt and Helen Darbishire. 5 vols. 1940-1949.

Coleridge: *The Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Ernest Hartley Coleridge. 2 vols. 1912.

Byron: *The Works of Lord Byron*, ed. Ernest Hartley Coleridge (poetry, 7 vols.), Rowland E. Prothero (letters and journals, 6 vols.). 13 vols. 1898-1904.

Shelley: *The Complete Poetical Works of Shelley*, ed. Thomas Hutchinson. 1904 (OSA ed., 1905).

Keats: *The Poetical Works of John Keats*, ed. H. W. Garrod. 1939 (2nd ed., 1958).

9) "A critical edition of a book will be set from a particular basic text, and the chosen original is called the copy-text" (Philip Gaskell, *A New Introduction to Bibliography*, p. 338).

10) To the best of my belief seventeen distinct versions of *The Prelude* can be detected in the manuscripts. Logically, of course, the alteration of a single word — even of a single comma — must create a new version; those I have in mind, however, appear to be thorough-going revisions, each of which for a time left the poet satisfied with the poem as a whole. ('Revision as Making: *The Prelude* and Its Peers', in *Romantic Revisions*, ed. Brinkley and Hanley, pp. 20-21)

11) ... a chronological presentation can best reveal the growth of the poet's mind ... and the unfolding of his imagination.... It follows ... that one *must* print a text which comes as close as possible to the state of a poem when it was first completed. (Stephen Gill, *William Wordsworth*, 'The Oxford Authors,' p. xxxi)

12) If *The Prelude* had been merely an account of Wordsworth's early life, there would have been no need for these periodic updatings. But it was also an embodiment of views and values that had to be brought into line as times changed, and he himself responded to change. Revision was a responsibility. (Brinkley and Hanley, p. 21)